

日本災害看護学会 令和6年能登半島地震・能登豪雨災害看護プロジェクト活動報告

報告年月日：2024年10月30日（水）

活動隊員：松田 朋子

1. 活動期間

2024年10月11日（金）8時30分～15時00分

2. 活動場所

珠洲市立大谷小中学校避難所（石川県珠洲市大谷町1字78番地）

3. 令和6年能登半島地震による石川県珠洲市の被害状況

（第164報 令和6年10月9日15時00分現在：石川県庁 危機管理課）

人的被害 死者：126人（うち災害関連死：29人）負傷者：重傷47人、軽傷202人

住家被害 全壊・半壊・一部破損：5,550棟、非住家被害：5,996棟

避難所開設数：12箇所 避難者数101人

4. 令和6年奥能登豪雨による石川県珠洲市の被害等状況

（第22報 令和6年10月11日（金）14時00分現在：石川県庁 危機管理課）

人的被害 死者：3人 行方不明者：0人 負傷者：軽症9人

住家被害 全壊：5棟 床上浸水：112棟 床下浸水：381棟

避難所開設：9箇所 避難者数48人

5. 大谷地区避難所の状況

㊦ 避難者数

大谷小中学校避難所：28人（70歳以上：3人、児童・生徒：0人）

㊦ 避難所運営と生活状況

対口支援の福井県職員による避難所運営支援が行われており、避難所内の掃除や物資の整理、環境整備等が避難所管理者の指示のもと支援されていた。雨が降るたびに土砂が流れ出し、乾燥すると走行するトラック等によって砂埃が巻き上がる状況であった。そこで、珠洲市へ相談し高圧洗浄機による道路の清掃が行われた（写真1）。

この日は飲食店企業による牛丼の炊き出しがあった（写真2）。在宅避難者も含め、多くの被災者が食堂に集っていた。炊き出し情報は避難所内でのポスター掲示やSNS等を用いて様々な媒体で情報共有されているが、情報が行き渡るのが難しく、炊き出しがあることを知らない被災者もいた。しかし、住民らは自主的に互いの電話番号を交換するなどして情報共有を行っていた。

6. 支援活動の実際

n 環境整備

朝、訪問するとすでに避難者の1人がモップを使って体育館内の清掃を行っていた(写真3)。話を聞くと、自分たちの生活の場なので、いつも掃除をしていると話されていた。また、咳をしている人が増えているのが気になるとのことだった。避難者は掃除や食事作りなど、自ら率先して避難所の運営・保守業務を担っていた。

晴れの日が続くと、山から流れ出した土砂が通行する車によって舞い上がる。そのため、避難所となっている体育館の中も日々掃除されているが、砂による汚染が見られる。生活スペース内に設置されているテーブル類の上は、砂埃の他にも食べ物等による汚れも目立っていた。そのためテーブル類の拭き掃除を行ないつつ、テーブルの上に置かれているチラシ、飲食物を整理した。

n 避難者支援

日中は避難者の多くは自宅や仕事へと出かけており、在室しているのは5名程度であった。

希望者の血圧測定を行い、体調の確認を行なった。体調不良を訴える避難者はいなかった。血圧が高めでフォローされている人も、低下傾向にあった。内服薬の飲み間違いで残薬が足りなくなっている避難者があり、不足分の薬の処方依頼や、指示通りに薬が飲めるように薬の保管場所に明記するなど、他団体の支援者と共に調整を行なった。

避難生活の長期化に伴い、今後の生活再建の不透明さに対する不安感が聞かれ、地域を出ていく住民も多くいるため、寂しいとこぼされる。このままここに住み続けていいのか、住み続けられるのか不安な中での避難生活となっていた。仮設住宅の完成も間近というタイミングであったこともあり、落胆される様子が見られた。また、一方で仮設住宅に入れるのかと不安に思っているとこれまでも聞いていた避難者からは、仮設住宅に当選し入居できることが決まったと喜びの声も聞かれた。

7. 支援活動を通しての所感と課題

長期化する避難生活の中で、避難所内での役割も一部の人によって担われている現状があり、他避難者の避難所運営への自主的な参加を望む声が聞かれた。高齢化率の高い地域で、さらには日中避難所内にいる人の数も少ない状況でできる範囲は限られてはいるが、主体的な避難所運営の風土はすでに地震後の避難所生活の中で形成されてきている。今後も避難者が自主的に避難所運営に参画できるよう、支援者からも避難者へお手伝いをお願いする声かけや、避難者による避難所の保守活動に対する労いの言葉を積極的にかけていきたい。

参考資料



写真 1. 高圧洗浄機で土砂を洗い流す様子



写真 2. 飲食店企業による炊き出しの様子



写真 3. 避難所内を掃除する避難者の様子